

# 地域における近代建築

—— 日土小学校の保存によせて ——

高 安 啓 介

近代建築は、一見したところ、地域らしさを感じさせないものであり、文化とさえ見なされないこともあり、地域文化をめぐる私たちの関心に引っかけにくいものである。そもそも、近代建築とは何であるかということは、多くの人々には、どうでもよいことかもしれない。そこでここではあえて、私たちの身のまわりにある近代建築について理解を深めるためにも、根本から考え直したいことがある。第1に、近代建築とはそもそも何かということ。第2に、それはいかにして地域のものとしての性格を帯びるのかということ。第3に、それはいかにして文化財としての価値を持つのかということである。本論では、具体例をとおして、これらのことを明らかにしたい。

愛媛県八幡浜市にある日土<sup>ひづち</sup>小学校は、そのうえで、格好のモデルとなるだろう。八幡浜市は、四国の西の端にあつて、漁業とみかん栽培で有名なところだが、この地方都市の外れに、とても洗練されたデザインの小学校の校舎があるとは、驚きである。この校舎は、松村正恒によって設計されたもので、近代建築の優れた成果として、これまで多くの人々の関心を集めてきた。しかし、校舎の老朽化が進むにつれて、その存続のありかたについて問われてきた。そこで以下ではまた、松村正恒はどのような建築家だったのか、日土小学校の建築としての良さはどこにあるのか、またその保存活動はどのように進んでいったのかについても明らかにしたい。

## 1 近代建築

20世紀の美術については、近代主義とは何だったのかということ、真っ先に考えるべきことだろう。近代主義とは、いわば、伝統をそれまでになく強く否定することで、新しい可能性をひらこうとする動きのことである。そしてまた、ここで

言えることは、伝統を強く否定することは、伝統と結びついた地域らしさを否定することでもある。したがって、近代主義とされる動きには、大きく2つの傾向があった。その1つは、個人の内なるものの表現をつきつめていく傾向であり、もう1つは、あまねく通用する美をもとめていく傾向である。たとえば、近代主義の動きのなかで、抽象絵画が出現したが、そのなかには、自由奔放さによって個人の内なるものの表現をねらったものもあれば、思いつきのようなものを削ぎ落とすことで、あまねく通用する美をねらったものもある。とはいえ、伝統を強く否定することで地域らしさが失われているようにみえても、何らかの地域らしさが残っているということは、ありうることである。

20世紀の建築について、近代主義の成果とみなされるもののなかには、たしかに、自由奔放さによって強い個性をそなえたものもある。しかし、建築の場合、自由奔放なかたちにうったえるならば、「表現主義」だとして厳しい批判にさらされるにちがいない。なぜなら、建築はそもそも実際に使われるものでもあり、個人のあからさまな自己表現は、望まれないからである。それゆえ、建築について近代主義というときには、合理主義であるとか、普遍主義といったことが、前面に出るようになった。たしかに、近代建築の定義をめぐっては色々な見解があるが、ここではかなり限定して考えたい。これはあくまでひとつの定義であるが、近代建築とは、過去の様式によらず、無駄な装飾をなくし、できるかぎり単純なかたちによって、生産や生活にもっとも適合したものの在りかたを追求する、そうした合理主義にもとづく建築のことであると言えるだろう。そしてそのかぎり近代建築は、理念としては、あまねく通用するものとして普遍性を目指すものでもあった。したがって、それは「インターナショナル・スタイ

ル」と呼ばれたり、「ユニヴァーサル・スペース」を生み出すものと考えられたりもした。とはいえ、近代建築であっても、地域らしさが強く出ることには起こりうる。むしろその矛盾めいたところこそ、私たちが目を向けたいところである。

ドイツの建築家、ヴァルター・グロピウスの代表作であるバウハウス・デッサウ校（1926）は、近代建築のひとつの典型として知られている。それまでの組積造では、重さを支える壁が必要だったが、この校舎は、鉄筋コンクリートの枠で支えられており、重々しい外壁は取り払われている。そしてその代わりにガラスのカーテン・ウォールが表面を覆っているが、これはもはや風雨を遮るカーテンにすぎず、構造体としての役割を担っていない。重さを支える太い柱は、カーテン・ウォールの背後に離れてある。とはいえ、今日の私たちから見れば、この校舎はもはや特別なものには見えないかもしれないし、これがパルテノン神殿などと同じように、文化財としての価値を持つとは、なかなか信じられないかもしれない。グロピウスがここで試みたことは、石や煉瓦によるところの重々しさから自由になることだった。そして、そのために彼は、表面をガラスで覆うことで、ものの非物質化をねらったのだった。美術史家ギーディオンは、交わる壁面それぞれが透明であるために、面と面とが重なりあっているように見えること、すなわちoverlappingの効果を指摘した。これは、キュビズム絵画に通じるものとして、時代の美学をあらわすと考えられた<sup>(1)</sup>。

ル・コルビュジエによるサヴォア邸（1929-31）もまた、近代建築の一つの典型として知られている。この住宅は、地上から持ち上げられたかたちになっており、浮遊した感じによって、それまでにない軽さをそなえている。また柱が重さを受けるので、構造上の役割から自由になった外壁には、水平連続窓があげられている。さらに、下から上へとスロープが設けられ、囲われたテラスもあるなど、この住宅は、たんに外部に開かれているというだけでなく、ギーディオンが指摘したように、内部と外部はたがいに浸透しているように

感じられる。この住宅では、このように、内部と外部を結ぶための色々な試みがなされているが、それもまた近代テクノロジーに負うところが大きく、こうした空間の造形にも、新しい美学のあらわれをみることができる。

日本でも、第2次世界大戦前にすでに、近代建築の考えは試されていた。そして戦後、1950年代から60年代になると、日本の建築家たちは、あたえられた状況に応じて、近代建築の独自のありかたを模索できるようになっていた。したがって、その頃の近代建築を見ると、建築家の個性が強くあらわれていたり、地域との関係を問うたりと、かならずしもインターナショナル・スタイルとしてくれないものが現れてきたことがわかる。

丹下健三は、広島ピースセンター（1952）に強い個性をあたえた。現在、広島平和記念資料館となっているそれは、近代建築のあらゆる特徴をそなえながら、桂離宮のような伝統建築を連想させるものでもある。またル・コルビュジエのように、長方形の箱はピロティで持ち上げられ、足元には広場が広がっている。ピロティと広場というモチーフは、市民にひらかれた場所として、民主主義の象徴としてあつかわれているように見える。

丹下健三による香川県庁舎（1958）も、インターナショナル・スタイルをとりながら、同時にまた、日本らしさを感じさせるものである（図1）。この庁舎は、鉄筋コンクリート造ながら、柱と梁による構造を露出させることで、木造建築のような感じを出している。さらに可能なかぎり薄くしたコンクリートの小梁は木造建築の垂木のようにもみえ、そこに軒の意匠が取り入れられていることが分かる。このように、インターナショナル・スタイルでありながら日本らしさを感じさせるその手法は、洗練されており、地方の庁舎建築のモデルになるほどだった。

香川県庁舎と日土小学校はいずれも1958年に竣工したものだが、それを比べると、面白い違いが浮かびあがる。香川県庁舎が、鉄筋コンクリートによって木造のスタイルを模倣したならば、愛媛

(1) S・ギーディオン『空間・時間・建築』太田訳、丸

善株式会社、1969年、572-573頁。



図1 香川県庁舎



図2 日土小学校

県にある日土小学校は、木造によって鉄やコンクリートによるスタイルを取り入れている(図2)。たとえばそれは、ガラスの水平連続窓にみることができる。ただしそうした意匠は、かたちだけの模倣ではなく、薄暗い教室のなかに多くの光を入れたいという考えからきている。丹下健三は、ピースセンターに記念碑の性格をあたえ、香川県庁舎に日本らしさをあたえたが、これにたいして松村正恒は、日土小学校において、崇高な理念をあらわしたり、日本らしさを出そうとしたりはしなかった。この小学校からは、そうした気負いは感じられない。松村は、そのかわり、実質にかかわることに専念しようと、子どもが快適に暮らせるための様々な工夫をした。

## 2 国際組織

20世紀の末になると、近代建築の名作が次々と取り壊されたり、もとの姿をとどめぬほどに改造されたりするようになった。このことは、すなわち、近代建築が保存されるべきものと見なされなかったということである。近代建築は、たしかに、芸術であることを主張するものではなく、しかもそれほど古くないために、文化遺産とは見なされにくい。そこでこうした状況を打開するため、1988年にオランダのヘンケット教授の発案によってドコモモdocomomoという国際組織が結成

された。これはThe Documentation and Conservation of buildings, sites and neighbourhoods of the Modern Movementという長い英語名称を略したもので、訳せば「近代運動にかかわる建物や周辺環境の記録および保存」のための組織ということになる。ドコモモが対象とするのは、おおむね近代建築であるが、この名称からうかがえることは、単体としての建物だけでなく、景観全体の保存もありうることを、さらにまた、記録という作業もまた重要だということである。1990年にはオランダのアイントホーフェンで第1回総会がひらかれ、アイントホーフェン宣言として「ドコモモ憲章」が採択された。しかしこの憲章では、近代建築について、とくに明確な定義はなされていない。おそらく、各国ごとの事情の違いをみとめ、保存のネットワークを強化するねらいがあったと思われる。

ドコモモ本部は、2000年のブラジル大会までに、各国ごとに現存する近代建築を20件ずつ選んで、それをまとめて出版する計画を立てた。そのとき日本はまだ正式にドコモモに加盟しておらず、日本建築学会がドコモモ対応ワーキング・グループを組織して、この選定作業にあたった。この作業にあたっては、ドコモモ本部から詳しい指針が出されなかったため、日本のワーキング・グループは次のような定義を行っている。すなわち、近代建築とは「合理主義に立脚し、線や面、ヴォリュームという抽象的な要素の構成による美

学をよしとする、社会改革志向に裏打ちされた建築運動」とされる。なお、そこで選ばれるのは、1920年代から1960年代までのものに限られた。というのも、1970年代からは、近代建築にたいする懷疑が強まったからである。日本の20選に入っものの内には、例えば、同潤会アパート、広島ピースセンター、香川県庁舎、日土小学校も入っている。そしてこの20選にちなんで、その一つに選ばれた神奈川県立近代美術館で、展覧会も行われた。このように、文化財としての建築を破壊から守るには、こうした登録作業は、もっとも重要な作業であるが、しかし残念なことに、このリストに入っているでも消滅の危機から逃れられるわけではない。たとえば、同潤会アパートは、関東大震災の被災者のための復興住宅として東京および横浜の一六箇所建設されたものであるが、リストに上がってからも、青山アパートや大塚女子アパートが姿を消したため、そのほとんどが失われたことになる。日土小学校についても、築後50年近くたって、その行方は不透明になった。たとえ破壊が避けられても、大改修によって全く異なったものになる恐れもある。なお2003年には、近代建築リストは100選にまで拡張され、ふたたびその展覧会が催された。

### 3 松村正恒

日土小学校を設計した建築家、松村正恒はどんな人物だったのか。松村は、1913年に愛媛県の大洲に生まれた。彼は2歳で父親と死別し、祖母のもとで育つが、このことがその後の仕事にも、少なからず作用していると思われる。1932年に、武蔵高等工科学<sup>ちかただ</sup>校に入学。そこでバウハウス帰りの教授、蔵田周忠に感化される。卒業後は、蔵田の薦めで、土浦亀城の建築設計事務所<sup>ちかただ</sup>で働くことになる。土浦という人物は、アメリカの建築家、フランク・ロイド・ライトのもとで学び、近代建築の典型というべき、四角い箱形の建物を手がけたことで知られ、みずからモダンな生活を実践して

いた建築家である。このように松村は、この2人の師のもと、海外の近代建築の進んだ考えになじんでいった。しかし、若い松村は、近代建築のファッションとしての新しさに心を奪われたことはなく、社会改革を心に抱きながら、自分の生い立ちもあってか、とくに児童施設に関心を持つようになった。そして学生時代からの研究の成果は、雑誌『国際建築』の特集「新託児所建築」にまとめられている<sup>(2)</sup>。そのなかで、彼は保育学校の在りかたについて、こう述べる。

見栄を張つたり、誇張したスケールを暗示するような建築は絶対に避けられるべきで、成人の使用する普通の建築よりもそのスケールを一段と下げねばならぬ。幼児の要求せるものは、大人本位の堂々たる構えの建築ではない。記念碑性は学校建築において必要としない。保育学校の意匠は、大人の感情を満足させる必要は毛頭ない。記念碑性の如きものは児童心理に訴える何ものも蔵せず、それは児童にとっていささかの威厳も感ぜしめず、積木の建築と何等撰ぶ所がない。今日の保育学校は、幼児にとつて絶大の魅力があり、豊富な光と色を蓄えた場所であってはならない。今世紀の保育学校建築の特性は、軽快ななかにも力強い表現を備えてゐることである<sup>(3)</sup>。

長く引用したが、ここには、彼がのちに実現することになる学校建築のコンセプトがすでに含まれている。第1に、子どもにあった大きさを心がけること。第2に、見せかけだけものは避けること。第3に、光と色にみちた場所をつくることである。松村は、1939年より満州の新京にある土浦事務所で働くことになるが、1941年にはその職を辞めて、農地開発営団に入る。彼は、新潟に住み、秋田などを対象として、農村建築の調査研究を行った。このように、都市から植民地へ、都市から農村へという移動によって、彼は、何を目の当たりにしたのだろうか。花田が指摘するよう

(2) 松村正恒「新託児所建築」『国際建築』、1939年9月、357-398頁。

(3) 同上、385頁

に、日本の近代化をめぐるさまざまな矛盾を目の当たりにしたにちがいない<sup>(4)</sup>。そしてこのことが、彼の生きかたや、彼の設計理念に少なからず影響をあたえていると思われる。

松村は、戦後しばらくして、八幡浜市役所の職員として数々の公共建築の設計を行った。彼自身は「市役所に入ったのは、いわゆる食うため」だと述べているが、彼の代表作はむしろ1960年に退職するまでの市役所時代に集中している。松村がそのなかでも多く手がけたのは学校建築であったが、彼はこのとき、日本風をねらう流行に反発し、学校らしさを象徴するだけのデザインを退けた。そしてそのかわり彼は、より実質にかかわること、すなわち、子どもにとって快適な空間をこころがけた。残念なことに、そのほとんどはすでに取り壊されてなくなっているが、たしかに、彼の手がけた学校建築を古いものから順にみると、デザインの進化の跡がうかがえる。そのいくつかを見ていきたい。

八幡浜市立川之内小学校（1950）は、松村の手がけた校舎の現存するもののうちでは最も古いものである。この校舎は、懐かしの木造校舎のたたずまいを見せながらも、すでに松村らしい工夫がほどこされている。まず外側からみても大きく窓が開けられていることが分かる。それから、この校舎の裏にまわると開放廊下になっていて、外に面したほうの庇が長くのびているため、廊下が暗くならないように、庇の上に横長の連続窓を設けることによって、光が取り込まれている。階段室や廊下のつきあたりでは、フルサイズの窓がとられている。これも多くの光を導き入れるためのものであるが、こうした工夫はその後さらなる進化をとげることになる。

八幡浜市立長谷小学校（1953）は、みかん山の中腹にいまもある、とても小さな学校である。この小学校においては、廊下にかかる屋根の位置が低くおさえられ、そのうえに採光用の窓が設けられている。こうすることで、教室のなかに廊下側からも、外からの光が直接入り込むようになって

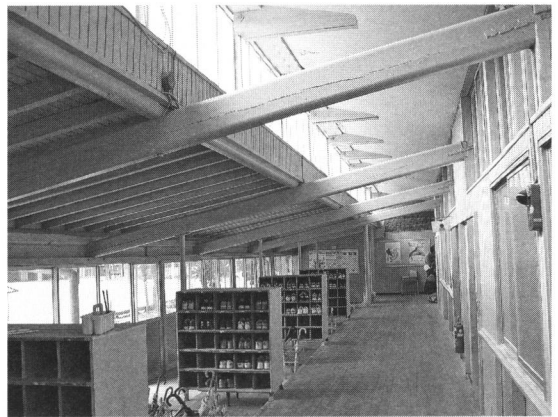


図3 江戸岡小学校の昇降口  
（この校舎は2004年に取り壊された）

いる。こうした両面採光の工夫は、彼の建築のひとつの目印となっていく。

八幡浜市立江戸岡小学校（1953）は、松村が設計した木造の学校建築のなかでも、規模が大きく、完成度の高いものであったが、2004年にその木造校舎はすべて取り壊された。昇降口はひととき美しく、柱のない広々とした空間に、庇の上の窓から光が差し込み、明るく淡い色彩がそれを拡散させている（図3）。また、階段室においても、廊下においても、窓が大きく取られていて開放感にあふれている。そしてやはり、廊下にかかる屋根の位置が低くおさえられ、教室のなかに、廊下側からも直接光が差し込むようになっている。江戸岡小学校の特別教室棟もまた魅力あるものだった。その緩やかな階段を上ると、広くとりわけ明るい空間があらわれる。すべて手作りだという手すりの下の紡錘形のかたちもまた軽さをあらわしている。この空間は、音楽室の前にあって、コンサートホールのホワイエのようであり、ベンチも備えつけられていて、子どもたちにとって心地よい居場所となった。

松村のそれまでの学校建築の集大成にあたるのが、八幡浜市立日土小学校（1958）である。日土小学校でも、2階廊下の屋根は低くおさえられ、教室のなかに外からの光が入り込むようになって

（4） 花田佳明「モダニズムというノスタルジアー松村正恒の残したもの」『建築文化』、1994年9月、58頁。松

村正恒にかんして、もっとも示唆に富む論考である。

いる。この小学校ではさらに、クラスター型とよばれる教室配置も採用されている。クラスター型とは、廊下と教室をたがいに切り離して、教室をあたかもブドウの房のように独立させるプランのことである。日土小学校では、廊下と教室とのあいだに中庭が設けられることで、おのおのが独立した空間となっており、両面から光が入り、風が抜けるようになっている。廊下と教室をつなぐ空間は、あたかも家の玄関先のようにであり、廊下から分離されている各教室は、静かで落ち着いた空間となっている。もともと日本建築学会が、戦後の新しい学校づくりを目指してこの考えを提唱しようとしていた矢先に、地方の建築家がこれをいち早く実現したことで、日土小学校はその竣工とともに建築研究者から注目を集めた。

松村正恒の名声をしめす例として、しばしば言及されるのが、『文藝春秋』1960年5月号の「建築家ベストテンー日本の10人」という企画で、松村がその10人の1人に選ばれたということである。花田が指摘するように、松村がここで選ばれたということは、東京で活躍する名だたる建築家たちにたいして彼が何らかの「強み」を持っていたということだろう<sup>(5)</sup>。巻頭グラビアには、選ばれた10人の写真が載っているが、スーツにネクタイでポーズをきめた他の9人にたいして、松村は、日土小学校の屋外階段でノーネクタイにスリッパ履きで立っていて、背後には、山や川や子どもたちが写っている。その写真は、松村の人柄をよくあらわしているように見える。

#### 4 日土小学校

日土小学校は、近代建築のひとつの成果として認められている。近代建築とは、いうならば、過去の意匠によらず、無駄な装飾をなくし、できるかぎり単純なかたちによって、生産や生活にもっとも適合したものの在りかたを追求する、そうした合理主義にもとづいているということである。日土小学校は、近代建築として唯一無二のものであり、また地域のものとしての性格を帯びている

が、そのことはとくに次の点に見ることができる。1つめに、合理主義の精神にもとづき、子どもにとって快適な空間づくりを追求していること。2つめに、鉄やコンクリートを用いて実現されるスタイルを、木造によって実現したこと。3つめに、自然ゆたかな地方に立地し、まわりの環境との融合をはかっていることである。それぞれについて詳しく検討したい。

日土小学校は、近代建築にふさわしく、合理主義の精神にもとづくものであり、子どもがそこで生活することが一番に考えられている。したがって、立派な構えの入口のように、子どもにとって意味のない、威厳をしめすだけのものは避けられており、校庭側の外観はすっきりしている。校舎に入ると、子どもたちの昇降口は、光が両方から入るために明るく、向こうとの間仕切りをなくした靴箱は、風通しと見通しを良くしている（図4左）。朝登校したときに靴箱の向こう側に友達の顔が見えて、おはようと声をかける、そうした情景が浮かぶ。靴箱はあたかも宙に浮いているかのように足元を浮かせてある。階段の一段一段は、大人にはつまずきそうなほど低く、小さな子どもには歩きやすい高さとなっている。そして、その緩やかな勾配によって、広くゆとりある空間がもたらされている。廊下には物を置くため棚があり、そこに座ることもできる。このように階段や廊下は、たんに通りぬける場所ではなく、過ごす場所としてデザインされている。そして教室は、廊下から離されているので、両側から光をとることができるとともに、落ち着いた雰囲気のところとなっている。これほどまでに光を取り込むことが重要であったのは、かつては照明器具がなく、自然光のみが頼りだったからである。しかし今日でも、そうした工夫は無用になったわけではなく、自然光にあふれる教室は心を和ませる。もっとも、松村はぬかりなく1階の外側に、直射日光が入るのを防ぐルーバーを取りつけている。このように、子どもにたいする細やかな配慮がいろいろなところに見られる。

日土小学校は、近代建築でありながら木造であ

(5) 同上、57頁。

る。近代建築は、もともと、近代の工学技術の成果を取り入れることを重視してきたため、一般には、鉄やコンクリートが用いられることを前提として、むきだしの構造、装飾のない平らな表面、広いガラス面といったことをそのスタイルとしてきた。これにたいして、日土小学校では、その当時、鉄やコンクリートを思うように使えなかったことから、しかたなく木造でそのスタイルが試みられている。たとえば、校舎のどちら側をとってもガラス面が連続しているところにモダンなスタイルを見ることができよう。なおこれは、外壁と柱を分離することにより(図4右)、外壁がもはや重さを支えるものではなくなったので、表面をガラスで包みこむデザインが可能となったということである。また、この木造校舎は、かなり老朽化していると言われるものの、重さを支えている構造材は、外壁の後ろにひっこんでおり、風雨にさらされないで、著しい劣化は避けられている。つまり、耐久性も配慮されていることが分かる。また日土小学校は、木造でそれまでになく軽快な感じをだしているが、そのぶん強度を増すために、ところどころに鉄の筋かいを入れており、

教室の長手方向には鉄の梁を入れている。これは大きな木材を使わないですむ工夫であり、したがって、日土小学校はハイブリッド建築であると言えなくもない。なおこの校舎において、近代建築らしくない唯一のところは、近代建築の一つの目印となっていた平らな屋根ではなく、古い建築をおもわせる切妻屋根がのっているところだろう。それは、木造建築であることからくる結果である。

日土小学校は、近代建築としては珍しく、地方の山あいの集落にあって、その集落から見下ろされるところ、みかん山にはさまれた小さな川沿いにひっそりと建っている。近代建築というと、都市を形成するものとしてのイメージが強いが、日土小学校については、自然と一体となって、たがいの良さを高め合っている(図5)。たとえば、1階にも2階にも川にせりだしたテラスがあって、泳ぐ魚の姿をみることもできる。また、川の反射する光のゆらめきが、庇や教室の天井に映し出されているのをみるのは気持ちよい。さらに、校舎から眺められる風景とともに、耳に聞こえてくる音風景も、素晴らしい。風景がランドスケー

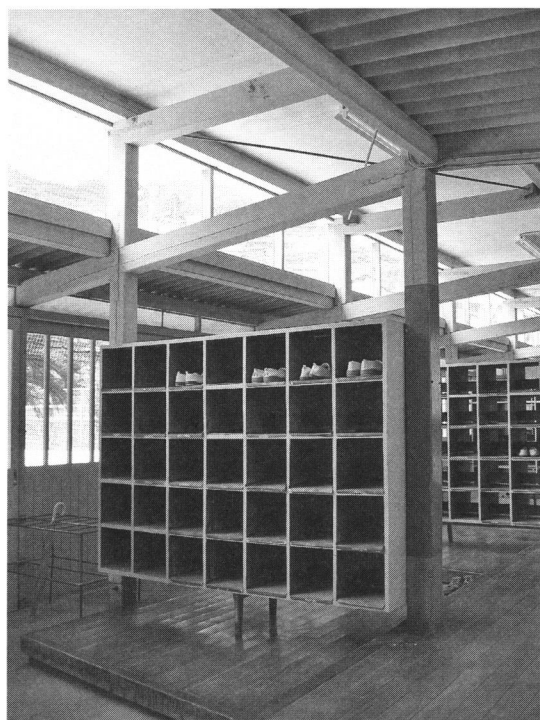


図4 日土小学校の内部



「landscape」なのをたいして、音風景にたいしては、サウンドスケープsoundscapeという造語がある。私たちが風景に関心をもつと同じくらしいに、身のまわりの音風景をもっと自覚せよということがサウンドスケープの語に込められている。日土小学校の音風景については子どもたちに聞いてみるのもよいだろう。川の流れる音や、野鳥の声や、もしかしたら思わぬ音が聞こえるかもしれない。

日土小学校は、こうした特色をもつことによって、近代建築でありながら、地域のなかに溶け込み、地域のものとしての性格をおびてきた。日土小学校はまた、このようにして、近代建築のなかでも唯一無二なものとして、文化財としての価値を持つものでもある。より一般化して言うならば、近代建築が文化財としてどれほど価値をもつかを考えると、2つの重要なポイントがある。その一つは、建築がどのような空間をもたしているかということであり、もう一つは、建築がどのような記憶にかかわっているかということである。そこで、これらのポイントについて詳しく説明したい。

## 5 空間の美学

建築は、どのような空間を形成するものなのか。近代建築によってもたらされる空間は、とくにどのような質をそなえているか。ギーディオンの考察は、このことについて考えるうえで、いまなお足がかりをあたえてくれるだろう。まず、建築によってもたらされる空間には、2種類のものがある。ギーディオンに倣って言うならば、その一つは、建築が外にむかって「放射する」空間であり、もう一つは、建築の内において「掘り抜かれた」空間である<sup>(6)</sup>。つまり、建築によってもたらされるのは、ひとつに外部空間であり、もうひとつに内部空間である。そしてそのうえで、ギーディオンは、近代建築に特有の空間の質を「内部と外部の相互浸透」にみている。つまり、近代建築では、鉄骨や鉄筋コンクリートによる骨組構

造によって、重々しい壁を取り払うことができるようになったので、内部と外部をつなげる色々な工夫がなされるようになったということである。また、ギーディオンによると、近代建築のこうした空間の質は、その周りをめぐり、内と外のあいだを移動することによって、はじめて開示されるものである。すなわちこのかぎり、近代建築において、空間と時間とはとくに密接につながっていると考えられる。

建築によってもたらされる空間は、音楽における響きと同じように、目に見えない曖昧なものである。それは、漠然としていて、雰囲気のようなもののようにも感じられる。しかしその一方で、建築によってもたらされる空間は、音楽における響きと同じように、論理をそなえたものであり、そうした論理は、とくに次のときにみとめられる。第1に、ヴォリュームをもつ部分どうしの相互関係によって、周りの空間がかたちづくられるとき。第2に、内部において、いくつもの区切りによって、ある効果がもたらされているとき。第3に、内部と外部が、有意義なしかたで結びつけられているときである。すなわち、空間を造形するとは、こうした論理を生み出すことであって、近代建築はとくに、装飾をやめて、空間を造形することに力を注いでいる。したがって、近代建築の美しさとは、装飾の美しさではなく、空間の美しさにはかならない。そして、こうした空間の美しさをとらえることは、目に見えないものの論理をとらえることであると言えるだろう。

日土小学校は、近代建築として、どのような空間をつくりだしているのか。校庭側の外観については、入口であることを主張するものの、視線を集中させるものはない。そのために、水平方向に伸びる全体の流れが強調されることになる(図2)。一方、川側の外観については、単調になりがちなファサードにたいして、テラスが軽いアクセントになっている(図5)。この校舎について言えることは、周りの空間をかたちづくるよりも、それが周りの風景になじむよう、適正なスケールが保たれているということである。これにた

(6) 前掲書、ギーディオン『空間・時間・建築』。





図5 日土小学校テラス

いして、内部空間は、かなり特別な質をもっている。そして、それは一気に明らかになるのではなく、移動のなかで明かされるものである。たとえば、透明感あふれる昇降口、上から光がそそぐ階段下、ゆとりのある階段室など、移動のなかで、さまざまな光景が繰り広げられる。内部空間の分節のたくみさは、とくに、廊下と教室がそれぞれ離されているところにみられる。両者をつなぐ場所は、じつに玄関先のようにであり、その向こうの教室はひとまとまりの親密な空間となっている。そして、内部と外部を結びつける工夫も、色々なところに見られる。たとえば、廊下の水平連続窓や、両側から光がさしこむ教室、1階と2階のテラスなどである。

## 6 空間と記憶

建築はどのような記憶にかかわるものか。すなわち、何に思いをいたらせるものか。とくに、建築によってもたらされる空間は、どんなことを記憶にとどめるものなのか。まず、作り手がある考えをもって作り出したものには、当然のことなが

ら、作り手の考えがあらわれてくるはずである。しかし、優れた建築であればあるほど、作り手の考えというのは、時代のさまざまな要請にたいする答えであるはずである。したがってこのかぎり、建築は、作り手の考えというよりも、時代の精神をあらわすものであり、私たちは、それをとおして、ある時代の精神をうかがい知ることができる。また建築は、使われることによって、あるいは人目にさらされることで、さまざまな思い出をみずから引き寄せるものでもある。すなわち、建築は、そこでどんな生活がいとなまれ、どんな出来事が起こったかということを、思い出させるものとなる。

近代建築にそなわる文化財としての価値について考えるとき、とくに2つのことが重要である。すなわち、近代建築は、空間の質において評価されるとともに、記憶の量において評価されるということである。たしかに20世紀後半になって、ポストモダニズムというかたちで、近代建築にたいする批判が高まった。その批判は、当然なされるべきものだった。要するに、近代建築は、過去の様式を否定し、単純なかたちに帰着することで、まったく意味をもたない、つまらないものになってしまったということである。とはいえ、近代建築の試みそれ自体が、伝統となるにつれて、かつて建てられたものは、はからずも意味深いものとなった。すなわち、近代建築もまた、様々な記憶をとどめるものとなったということである。

日土小学校の空間からうかがえるのは、どんな記憶だろうか。そこでまず言えるのは、設計者の思想であろう。設計者である松村は、たしかに生前いろんなことを述べたが、その設計にたいする考えや、独特のヒューマニズムは、学校の空間そのものが雄弁に語っている。またなぜこうしたものが作り出されたのかに考えがおよんだとき、設計者の思想を超えて、それが作られたときの時代が見えてくるだろう。さらにその校舎には、すでに数十年の歴史が刻まれており、地域の人々が昔のことを回想する拠りどころとなっている。足を踏み入れないと分からない空間の質は、雰囲気のようなものであり、とくに懐かしさを感じさせるところにちがいない。

## 7 学校のなかの学校

建築が、造形において優れていて、他にない空間の質をそなえているとき、そしてまた、過去の記憶をよびさますものであるとき、それは文化財とみなされる。さらに、そうした建築が、人々に多くのことを教え、人と人を結ぶコミュニケーションの媒体として働くなら、それはとくに、生きた文化財と呼ばれてもよい。日土小学校は、もともと学校であるが、校舎そのものが生きた文化財であるために、日土小学校は、いわば学校のなかの学校となっている。

2003年度に、日土小学校の6年生のあるグループは、総合学習の時間に、校舎の模型作りを行った。それまでに子どもたちは、松村正恒について調べ、校舎の特徴についてまとめており、模型作りにあたっては専門家のアドバイスも受けることができた。加工しやすいスチレンボードを使ったが、寸法の計算などで苦労したそうである。校舎全体の模型ではなく、校舎の一部が作り込まれているところは、ほほえましい(図6)。テラスや向こうのみえる下駄箱は、子どもたちにとって自慢の場所だったのである。指導にあたった先生によると、子どもたちは模型作りをとおして「あらためて自分たちの生活している校舎の良さに気がつき、子どもたちは一段と自分たちの学校が好きになった」という。このように子どもたちが自分らの生活している場所に関心を抱くことは、周りの環境への関心につながるはずである。

2004年の8月5日から2日間、日土小学校にて

「夏の建築学校」が行われた。これは、全国の建築学生や社会人たちが、近代建築と地域との結びつきについて学ぶことを目的としたものである。第1日目の昼過ぎ、参加者たちが次々と到着し、さっそく日土小学校を見学したあと、午後には、「フロンティア日土からの発信」「入門・松村正恒と日土小学校」「フランスの近代建築保存事情とdocomomo」の3つの授業があった。夜は、日土公民館に場所を移して、地域の方々の作ったおいしい夕食をいただき、日土小学校にゆかりのある方々のお話のあと、交流会がひらかれた。2日目は、日土小学校の校舎の掃除をした。もちろん感謝の意味をこめてであるが、掃除をすることで校舎建築の細かなところに目がいくようにとのねらいもあった。さらにまた地域の子どもたちと七夕飾りを作り、笹に飾りつけをするなど、楽しい時を過ごした(図7)。このように、大学生や社会人がここに来て、この校舎のなかで学びを深めただけではなく、地域の方々の温かいもてなしによって得がたい交流が実現された。

2005年の8月6日から2日間、松村正恒が設計した八幡浜市中津川公民館で、ふたたび「夏の建築学校」が行われた。はじめにまず、地域の子どもたちと笹の飾りつけをしたあと、「入門・松村正恒と日土小学校」「住宅の記憶の継承・1億総記憶喪失にならないために」「愛媛の近代木造建築」「中津川の地域と財産」の4つの授業が、晩まであった。夜には地域の皆さんとの大宴会となったが、ここで、この中津川公民館がどう使われてきたのかを聞くことができ、この公民館がいか

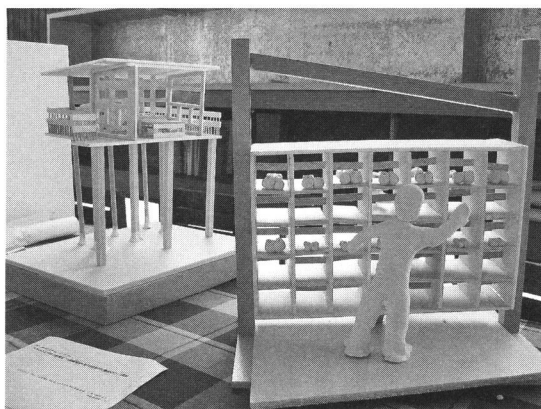


図6 生徒による日土小学校の模型



図7 夏の建築学校2004

に地域に根ざしてきたのか、その記憶を掘り起こすことができた。2日目は、中津川公民館において恒例の掃除を行い、松村らしい工夫を確認することができた。そのあと、参加者たちは、日土小学校と、川之内小学校とを見学した。川之内小学校は、先ほど紹介したように、1950年に建てられたもので、松村正恒による学校建築のなかでも現存する最も古いものである。ここで、日土小学校と川之内小学校とを比較できたことにより、松村の学校建築のデザインがどのように進化していったのかをうかがい知ることができた。2006年の8月にも「夏の建築学校」と称して、約60人の学生や社会人の協力のもと、日土小学校のかなり大がかりな現状調査が実施された。この調査を通して、50年あまり経ったこの小学校のありのままの姿から学ぶことは大きかった。

## 8 建築の保存

建築の保存をめぐる争いは、いわば、価値をめぐる争いである。なぜなら、建築の保存をめぐる争いは、建築にそなわる価値にたいする考えの違いによるからである。そもそも価値とは、ものにそなわる性質のなかでも、人間にとって好ましいとされる性質のことである。ただし、それは個人にとっての好ましさではなく、人々に共有された好ましさのことである。建築の場合、以下のような好ましい性質が、価値とみなされるだろう。

構造：十分な強度をそなえていること

機能：役に立つ働きをそなえていること

空間：美しい質をそなえていること

記憶：過去について語るものであること

教育：発見をうながすものであること

社会：人々を結びつけるものであること

建築においてまず要求されることは、十分な強度をそなえていることと、役に立つ働きをそなえていることである。しかし、それらのことを満たしていた建築も、時間がたてば、老朽化して壊れ

やすくなったり、時代の要求にそぐわなくなったり、使いにくくなったりするものである。けれどもその一方で、空間デザインにおいて優れたものはとくに、時間がたつにつれ、たんに美しいというだけでなく、記憶にかかわるもの、過去について語るものとなる。すなわち、保存問題はこのギャップから起こることが分かる。このとき、十分な強度をそなえたもの、時代の要求になかったものを急ぐ人々は、建て替えをもとめるだろう。そして、建て替えた効果は、短い期間にあらわれるはずである。これにたいして、空間固有の美しさにひかれ、それがとどめる記憶を大事にしたい人々は、その保存をもとめるだろう。だが、保存がほんとうに意義あるものだったかは、長い期間をかけて見とどけるしかない。そこで問題となるのは、いかなる価値を重んじるかということであり、短い先を見るのか、長い先を見るのかということである。

建築を保存するといっても、何をどの程度まで保存するのが問題となる。オーセンティシティ authenticity という語があるが、それはものの由緒正しさや、本物としての権威のことであり、建築については、複数の次元において測られるものである。まず、材料が保たれているかということがある。たとえば、もともと木造の校舎に後からコンピュータ室を設けるとき、アルミの窓枠や戸がはめられることは起こりうる。また、工法が保たれているか、意匠が保たれているかということもある。たとえば、耐震補強を行いつつ、もとの設計デザインを損なわないためにはどうすればよいかは、考えるべきことである。さらにまた、環境が保たれているかということもある。建築だけでなく、その周りの環境も維持されなければならないことは、ある建築を他の場所に移して保存するときに切実になるだろう。なぜなら、建築は、それが完成された後、その土地との結びつきを強め、その周りの環境と一体となって歴史を担うからであり、そうした結びつきを断ち切ることは、建築から意味を奪うことになるからである。

建築がもとのまま保存されなければならないのは、それが空間の造形においてとくに優れていて、たくさんの記憶にかかわるものであるからで

ある。しかし、建築は、当然のことながら、ただ保存されればよいわけではなく、十分な強度をそなえ、時代の要求にかなった働きができるように、必要な改修がなされなければならない。そして何よりも、それによって、多くの人々がそこから多くのことを学び、さまざまな交流が生まれることが、保存のもっとも深い意味だろう。したがって、保存はつねに活用とのバランスのなかで考えられなければならないことである。

20世紀の末に、近代建築の名作が次々と取り壊されたり、もとの姿をとどめぬほどに改造されたりしたのは、それらが保存されるべきものと見なされなかったからである。近代建築は、しばしば、単調で面白みがなく、意味を欠いているといわれる。しかしその批判があたらないことは、ここで明らかであろう。まず、近代建築は、目に見える表面をつくろうのではなく、空間の造形において、新たな局面をひらこうとした。そうした努力は、装飾による目立った美ではなく、何もないというストイックな美に向けられている。しかも、近代建築は、かならずしも画一化したものではなく、実際には、作家や地域によってじつに多様な姿をみせるものでもある。また、近代建築の試みそのものが伝統となるにつれて、かつて建てられたものは、はからずも過去の記録としての意味をもつようになった。こうして近代建築は、空間という観点からしても、記憶という観点からしても、保存されるべき対象となっている。

建築の保存について考えるとき、日土小学校ほどのよい例はない。なぜなら、その校舎は、芸術であることも、記念碑であることも主張していないからである。これを設計した松村はそれどころか、芸術をもたらしことも、記念碑をもたらしことも、きっぱり否定していた。むしろこのほうがよい。なぜなら、そうしたものにこそ、建築らしい美しさや、建築らしい記憶のありかたが、明かされるからである。もともと芸術でないもの、もともと記念碑でないものを保存するならば、いかなる美しさ、いかなる記憶のために、それを保存するのかということが問われてくる。しかも、松村自身、時期が来れば、自分の建築はなくなることとを当然と思っていたようである。松村の設計し

た小学校が取り壊されるにあたり、建築家みずからそのお別れ会に主席したという有名なエピソードもあるほどである。よく考えたらそれは変な話である。こうした場合、建築家の意に反して、彼の建築を残さなければならないのはどうしてか、私たちは説明できなければならない。簡単に言うならば、日土小学校は50年たって、建築家の意に反して、記念碑の性格をもったということである。

日土小学校の建築としての価値をみとめたのは、はじめは、建築の専門家たちであったが、2003年11月に、ついに日土地区住民の組織として「木霊の学校・日土会」が結成された。これは、日土小学校の保存を地元住民の意志としてうたえる会として、保存運動において大きな役割を果たしてきた。しかしその後、日土小学校をめぐる状況は、複雑になる。2004年9月7日、台風18号襲来により、東校舎の一部の屋根が飛ぶ、ガラス窓が割れるなどの大きな被害が出た。破損したところは、保護者や教師、市の担当者のおかげで速やかに修復されたが、これでいよいよ議論を先延ばしできない状況になった。一般には、行政が取り壊しを決めてから、地域住民が保存をうたえるケースが多いのにたいして、日土小学校の場合には、保存運動がようやく一本の流れとなり、地元で保存を願う人々が活動を始めたときに、PTAの代表は建て替えを要望したため、はじめ行政の側は慎重に構えているというという感じであった。PTAは、現校舎では、耐震性に不安があるだけでなく、教員たちが校庭を見渡すことができず、教室も見通すことができないので、不審者にたいして生徒の安全は守れないと主張している。おりしも全国で、建築の耐震強度や、学童の安全ということが社会問題化してきたこともあって、それは大きな不安になっていることは事実で、専門家の診断が必要になってきた。

2005年に入ってからすぐ、日本建築学会四国支部、日本建築家協会四国支部、愛媛県建築士会、愛媛県建築士事務所協会は、四会連名で、八幡浜市に「日土小学校建物の再生に関する要望書」を提出した。これは、現校舎のたんなる保存ではなく、新しい教育課題や、耐震性・安全性に対応した改

修が行われることを求めるものである。また同年10月には、ドコモ・ジャパンが世界各国のドコモ支部にたいして、日土小学校の保存にむけた呼びかけ文を送った。そしてこの呼びかけにたいしては、オランダ、イスラエル、ブルガリア、トルコから応援メッセージが寄せられた。このことは、ローカルなものがグローバルに認められたというより、ローカルなものどうしが共鳴できることをしめしている点で、面白い。2005年12月10日には、八幡浜市内にて「八幡浜の文化資産を考える―日土小学校の再生を目指して」と題されたシンポジウムが行われた。このシンポジウムのねらいは、日土小学校校舎の将来について考えるための判断材料を、地域の人々に提供することであり、そのために、学会の第1線で活躍している、建築史・学校建築・木構造のそれぞれの専門家が招かれた。またこの催しのなかで、地元の検討グループによる、日土小学校の改修案も発表された。この案は、日土小学校の校舎の文化財としての価値を尊重しながらも、耐震や防犯についても考慮したものであり、さらにまた、新しい時代にふさわしい、新しい教育環境の整備を目指すものでもあった。

八幡浜市は、すでに9月に「日土小学校再生計画検討委員会」を招集していた。この委員会は、市諸団体の代表、学校関係者、有識者などからなり、全四回の会議によって、日土小学校の現校舎のありかたを決めるとされた。保存改修かそれとも建て替えかをめぐっては、かなり激しい攻防が繰り広げられたが、2006年の3月に開かれた第四回目の委員会で、一応は、校舎を保存改修するという結論にいたった。同年8月には、八幡浜市の委託を受けて、日本建築学会が中心となって、日土小学校の現状調査が行われた。木構造の専門家による指導のもと、約60人の学生や社会人がこれに参加し、各部の実測を行ったり、老朽度を調べたりした。床下や天井、壁の内部など、見えないところの作りや状態も、丹念に調べられた。この木造校舎の各部はペンキで塗り直されてきたが、もともと各部はどんな色で塗られていたかは、これまであまり問題にならなかった。当時施工にあたった人からの聞き取りや、わずかばかり残され

た手がかりから、竣工当時のもともとの色はかなり違ったものだったことも分かった。先に述べたように、この6日間の調査は、この年の「夏の建築学校」も兼ねていたこともあって、その最後は、専門家によるまとめの「講義」と意見交換会によって締めくくられた。この調査は、夏休み中の子どもの不在のときに行われたが、数人の参加者から「この小学校の子どもたちも一緒だったら、子供たちにとってもよい体験になったのにね」という感想を聞いた。

## 9 むすびに

日土小学校の校舎は、近代建築のもっとも優れた成果の一つとして、今日にいたるまで、多くの人々の心をとらえ、人に優しい空間とは何かを教えている。日土小学校は、子どもたちにとっても、大人たちにとっても、生きた教材そのものであり、それゆえに多くの人々を引き寄せ、人と人を結ぶ場となりうることを証明してきた。しかもそれは、地域にとっての資産でありながら、それ以上のものでもある。日土小学校はdocomomoという国際組織によって、日本を代表する近代建築の一つに認定されたが、このことはすなわち、それが日本の文化資産であり、世界の文化資産であるということの表明である。すなわち、これにより、日土小学校の現校舎をふさわしいかたちで保存する責務が生まれたことになる。もちろん、ここで保存というとき、それを遺産として残すだけでなく、資産として活用することも前提としなければならない。そしてそのことは、日土小学校の子供たちの生活を犠牲にするものではなく、子供たちの生活に潤いをあたえ、教育の質を向上させるものでなければならないだろう。

現代の社会においては、多くの建物がかんたんに建てられ、多くの建物がかんたんに壊されている。この短いサイクルは、自然環境の破壊につながるだけでなく、私たちの文化や歴史の継承をも危うくする。私たちはいま、建物をたんなる消費物と考えてきたことからくる色々な問題に直面している。そしてそのため、専門家だけでなく、生活者としての市民もまた、建築の在りかたについ

で深く反省しようとしている。したがって、こうした時期だからこそ、日土小学校の保存と再生にむけて知恵をしぼり、力を合わせることは意味深い。そしてその結果、日土小学校の木造校舎がもとの姿をとどめつつ、ますます輝きを放ち、学校のなかの学校として再出発することができたなら、それは格好のモデルとして、多くの人々に影響をあたえ続けるだろう。

日土小学校をめぐる運動の記録

以下、日本建築学会四国支部編

『夏の建築学校 2006—日土小学校の再生に向けて』(2007)

『夏の建築学校・八幡浜』(2005)

『夏の建築学校・日土小』(2005)

『木霊の学校・日土小』(2004)

『子どもと学校建築』(1999)